

# 海外最新事情

## イギリス

### (1) 英国人は絶滅危惧種に指定されるのか?

英国の都市部の小学校でここ数年の間に、英国人の児童の割合が目に見えて下降しているという。ここで言う「英国人」とは、アングロ=サクソン人でもケルト人でもいいが、とにかく数百年来ブリテン島に居住している白人のことである。20世紀後半以降特に英国は多民族・多文化国家であったが、近年都市部においてよりいっそうその傾向が進み、「英国人」の方が「少数民族」になっている地域もあるのだ。二度の世界大戦における英国の人的被害は大変なものだったので、労働人口を確保するために英国は移民を積極的に受け入れた。特に旧植民地である東西インドや西アフリカの諸国から特定の職種（ロンドンのバスの乗務員とか）に集団就職が斡旋されたこともあり、ロンドンをはじめとする大都市に特に「外国人」が多くなっている。とはいえ彼らも英国籍を持つ英国人に違いないので、ここでは昔から英国にいる白人を「英国人」、その他の英国籍を持つ人々を「移民」と、カギカッコをつけて標記する。

ロンドン東部タワー・ハムレッツの小学校では、「英国人」の児童が全体の15パーセントで、最大多数を占めるのは65%のバングラディシュからの「移民」の子供たちだという。北西部のプレントでは「英国人」が7%、36パーセントがアジア人の、24%が黒人の「移民」である。だが西部のプロムリーでは79%が「英国人」であり、地域によって極端にその割合に違いがある。ロンドン以外ではマンチェスターとブラックバーンで「英国人」の割合が60%以下、ブラッドフォードで53%（ここはパキスタンからの「移民」が多い街として有名

だ）、バーミンガムで43%、レスターで41%である。だがイングランド南西部のデヴォン州ではこの割合が95%になる。リヴァプールを含む北東部も「英国人」の割合が高い地域で、例えばセフトンでは小学校で96.3%、中学高校で96.7%を占める。リヴァプールとその周辺も移民が多い地域だが、そのほとんどはアイルランドから渡ってきた人たちの子孫なので、彼らは「英国人」に含まれるのである。（以上の数値は2007年9月28日の『タイムズ』による。）

そういうわけで、かつては移民の受け入れに積極的だった英国政府も、英国の主要都市において「英国人」がマイノリティになりつつあることに対して危機感を抱いたらしく、2005年から英国籍取得のための筆記試験を導入し、国籍取得希望者全員に義務として課すことにした。これは全24問からなる、英国の地理、歴史、政治、文化などに関する設問に解答する（主に四択式）試験で、合格最低ラインは18問正解ということだ。毎年およそ10万人が受験し、その約3分の2が合格している。ということは、単純に考えても年間6、7万人は「移民」が増加しているということだ。

9月29日の『タイムズ』によると、ロンドン北部のパブで余興として、主に若年層の専門職階級の「英国人」100名がこの試験に挑戦し、全員が「不合格」という結果に終わったという。この24問は過去問の中でも特に難しいものが選ばれていて、しかもビター（英国のビール）などを飲んだ状態で回答しているのだから、という回答者からの「負け惜しみ」のようなコメントが掲載されていたが、一方で主催者側のパブ店主も「試験の内容と現実の英国での生活に重大な乖離がある」と述べている。ここで出題された問いをいくつか見てみよう。Q：北アイルランド議会の議席数

は？ A：108／125／64／82（正解：108）、Q：英国王が結婚できないのは？ A：王族の血縁者でない者／プロテスタントでない者／25歳以下の者／英国外で生まれた者（正解：プロテスタントでない者）、Q：両親のいずれかが本当の親でない子供の割合は？ A：10％／25％／40％／55％（正解：40％）、Q：平均時給で女性は男性よりどれだけ低い？ A：5％／10％／20％／同じ（正解：20％）。単純な正誤問題もある。Q：公共の場所ですべての犬は飼い主の住所・氏名が記された首輪を着用しなければならない。（正解：正）。

確かにややこしい問題が多い。だが、「移民」たちはこれに正解して英国籍を得ているのだ。ということは、「移民」の方が「英国人」よりも英国をよく知っている、という逆転現象が起きているということもあり得る。このままでは数の上でも中身についても「英国人」は絶滅の危機に瀕することになるかもしれない。

さて、私もこの24問に回答してみた。結果は11問正解だった。もちろん不合格だが、これを英国文化の研究者として恥ずかしい結果と考えるべきか、移住の予定がない外国人にしては上出来と考えるべきか、実は自分でもよくわからない。

## (2) 学校給食改善運動

一般的に言って、英国料理は世界中で評判が悪い。英国には美味な食べ物が存在しない、などと断言して憚らない無知蒙昧な人々の戯言に対して私は決して聞く耳を持たないが、一方で英国には途轍もなく不味い食べ物が存在することも事実である。また英国には味や栄養素に無関心な人々がいるということもまた事実である。

英国の学校給食は多くの場合自由選択である。給食を食べるか弁当を持って行くか、あるいは家に帰って昼食を済ませて再度登校するかは、各々の児童生徒やその親が自由に決められる。また給食を食べるにしても、ヴァイキング式に自分の食べたいものを食べたいだけ選ぶことができる。だがそうになると、子供に選ばせれば当然、また栄養

素に無関心な親に育てられた子供は特に、例えばチップス(揚げたジャガイモ)とチョコレートケーキと炭酸飲料、などというしょうもない組み合わせで昼食を済ませてしまうことにもなる。このような現状を憂慮して、二年ほど前から政府は給食改善キャンペーンを始め、炭酸飲料やハンバーガーが禁止になり、チップスが制限され、また炭酸飲料やジャンクフードの自販機を学校内から撤去する動きもあるという。(2007年10月3日付『インディペンデント』)

アイドル料理人のジェイミー・オリヴァーがこれに賛同して各地の学校を視察し、調理師たちに自分が考案した料理を教え、その様子を『ジェイミーの学校給食』(Jamie's School Dinners) というTV番組で伝えている。だが皮肉なことに、7月9日付の『タイムズ』によると、このプロジェクトが始まってから給食を利用する児童・生徒が20%も減少し、現在では10人中4人程度になっているという。このことは日本でも、10月17日付の『朝日新聞』朝刊で報道されている。ジェイミー君の指導の下に政府が作成した新基準が導入されて以来、調査対象となった27の学校のうち19校で給食利用者の著しい減少が見られた。英国の多くの子供たちにとっては、この人気シェフのプロデュースによる手の込んだ栄養価の高い給食よりも、慣れ親しんだ栄養価の低いジャンクな給食の方がいいということなのである。また彼のレシピは困ったことに現場の調理師たちからも不評を買っている。それまでは業務用冷凍食品を温める程度で済んでいた彼ら彼女らの仕事がこの若き達人のお蔭で複雑化し、彼ら彼女らの能力技能をはるかに超えたレベルの料理法が要求されているらしい。(とは言えそれほど特別に高度な技が要求されているわけではないのだが。) それに加えて、従来の学校給食は一食あたり約37ペンス(100円を大きく下回る)という低コストで運営されていたが、彼のメニューを実現するには「莫大な」予算が必要になるという問題もある。番組の中でオリヴァー氏は、調理師を一堂に集めて講義を行ったり、彼ら彼女らの待遇改善のために役所を訪れたり、教

育担当大臣を自分のレストランに招いて政府からの支援を増やすよう嘆願したりしている。

ジェイミー・オリヴァーは1975年エセックス州のクレイヴァーリング出身で、11歳の頃から両親が経営するパブの厨房を手伝っていて料理に興味を持ったという。ウェストミンスター料理学校卒業後フランスで修行し、TV番組『裸のシェフ』(The Naked Chef)以来数多くの番組と著作で人気を博すと同時に、英国各地や海外にレストランを開いている。彼の番組の多くは日本語字幕入りのDVDで入手が可能である。彼の英語は早口な河口英語(『語研ニュース』第11号参照)のためやや聞き取りづらいが、彼は世界各地の料理や食文化をよく勉強しているし、料理や食べることに関して独自の哲学を持っているので大変面白い。彼はまた、デイヴィッド・ベッカムの友人でもあるらしい。

### (3) スズメとムクドリのための庭

英国はバードウォッチング発祥の地でもある。この国は産業革命がもたらした工業化、都市化、あるいはさらに遡って中世・ルネサンス時代の大規模な森林伐採によって早い時期に自然を破壊してしまったので、自然環境や野生の生物に対する関心が目覚めるのも早かった、ということなのである。その英国で近年、スズメやムクドリなどの野鳥が急速に減少しているという。2007年10月25日の『タイムズ』によると、過去35年でスズメが64%、ムクドリが72%、ウタツグミが50%減っている。その原因のひとつは餌となる昆虫が減少したことだとされている。

王立鳥類保護協会(The Royal Society for the Protection of Birds: 略称RSPB)は10月20日にこれらの野鳥を保護するためのプロジェクトを発足させ、野鳥にとって居心地のいい庭を作るよう、国民に呼びかけている。RSPBが提唱するのは庭の「生命体の多様性」(biodiversity)を保持して、鳥の餌となり得る昆虫の種類と数を確保することである。具体的な提案として、(1)芝生を刈ら

ずに放置する一画をつくり、昆虫の棲家とする、(2)剪定して切り落とした枝を木の根元に積み上げ、コケやシダなどを育てる、(3)樹液や蜜が豊富な植物を植える。例えばヤグルマギク、ヒマワリ、フクロウソウなど、(4)外国産ではなく国産の植物を植える。それによって国内に棲息する昆虫が引き付けられる、(5)庭の縁の距離を稼ぐため、花壇の輪郭を曲線にする、(6)納屋の壁に蔦を這わせる、といったことである。だがよく考えてみれば、ここで提唱されていることは伝統的な英国式庭園のコンセプトの再確認に他ならない。花壇の輪郭を人工的な直線とせず自然な曲線にするのは基本中の基本であるし、国産の植物を植えよというのは19世紀にすでにウィリアム・モリスやウィリアム・ロビンソンが言っているし、草を刈らない一画を作れというのもフランシス・ベイコンの庭園論にすでに似たようなことが書かれている。

RSPBはまた、庭を持たない都市生活者にも呼びかけている。ベランダに鉢植えを置くだけでも、昆虫を集めてそれによって鳥を呼ぶことが出来るのである。(安藤 聡)

## 韓 国

### どうなる、韓国ドラマ

本年(2007年)9月7日付け「朝鮮日報」に、「跳ね上がる制作費—輸出はがた減り—韓国ドラマ“寒流”」と題した記事が掲載された。その記事を要約すると次のごとくである。

韓流を引っ張り東アジアを席卷してきた韓国のドラマ産業が危機の徴候を見せはじめた。すなわち、スター作家や俳優のギャラが跳ね上がる一方で、輸出額が減っているばかりか、国内の視聴率も落ちている。

韓国ドラマ制作社協会が、記者会見で「現在の制作条件では、韓国ドラマ産業が衰退するほかない」と発表した。というのは、「地上波放送局では制作会社側に実制作費の40~60%程度だけを支

給しているが、俳優と作家のギャラが天井知らずに跳ね上がって」おり、「制作単価が高くなり、輸出もうまくいかず、実験的な作品もこれ以上出なくなっている」からである。

最近の特 A 級の俳優、作家のギャラは、1 回あたり 3000 万ウォン（日本円にして 400 万円弱）を上回っている。このために、4～5 年前までは平均 9000 万ウォン（1200 万円弱）であったドラマ 1 回あたりの平均制作費が、今では 1 億 5000 万ウォン（2000 万円弱）まで上昇した。その結果、「視聴率が 30% を越えたドラマさえも赤字になった」という制作会社もある。また制作会社は、「地上波放送局が優越的地位を利用して、大部分のドラマ版權を持っている」ことを問題視したり、「3 年前に比べて作家、俳優のギャラが 2 倍以上も上がったのに放送局が制作会社に支給する金額は変わっていない」ことを問題視している。

ドラマの輸出額について見れば、2005 年に 1 億 162 万ドルまで跳ね上がった輸出額は、2006 年には 8589 万 1000 ドルまで急減した。また、国内の視聴率について上半期を基準に見れば、2004 年、2005 年には平均視聴率が 20% を越えたドラマが 11 編あったのに対し、2006 年には 6 編、2007 年には 7 編に減少した。

韓国放送映像産業振興院のキム・ヨンドク研究員は、「制作費が上がって、日本では、韓国ドラマはアメリカドラマよりも高い価格で売られており、価格競争力が落ちた」と言い、「元祖韓流スターたちが出演したドラマも、最近の数年間に東アジア市場でほとんど消費された状態であるから、ドラマの輸出額は継続して減少する可能性が高い」と言っている。

以上が、記事のあらましである。制作費の高騰などで優れたドラマ制作が難しくなれば、日本では「冬のソナタ」で火が付き、「チャングムの誓い」などを経て維持してきた韓国ドラマの人気は、今後どうなるであろうか。「韓流」は「寒流」に転落するのであるか。

最後に、その記事の中の図表をもとに、A 社の制作費上昇に関するデータを以下にまとめてお

く（単位：万ウォン）。

	2002年	2007年
ドラマ平均制作費	8000～9000	1億4000～1億5000
地上波放送局販売価格	6500～7000	8000～9000
特 A 級俳優ギャラ	500～600	2000～3000
特 A 級作家ギャラ	400～500	2000～3000

（田川光照）